様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年４月２０日現在

機関番号：３４３０４
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2008～2011
課題番号：２０７２００８４
研究課題名（和文）　モダニズム文学におけるベルクソン哲学の受容－キャサリン・マンスフィールドを中心に
研究課題名（英文）　The Reception of Bergsonian Philosophy in Modernist Literature: Katherine Mansfield and Other Writers

研究代表者
中野　永子（NAKANO EIKO）
京都産業大学･文化学部･准教授
研究者番号：８０４１１０１５

研究成果の概要（和文）： 1910 年からの数年間にわたり、哲学者アンリ・ベルクソン(HenriBergson) は本国フランスのみならずイギリスにおいても影響力を持ち、人気を博した。キャサリン・マンスフィールド（Katherine Mansfield）も、当時のイギリスで活躍していたほかの多くの作家と同様、ベルクソンから大きな刺激を受けていた。本研究では、マンスフィールドをはじめとする作家たちが、ベルクソンの理論をどのように解釈し、その解釈をどのような方法で表現しようとしたのかを探った。

研究成果の概要（英文）：For several years from 1910, the French philosopher Henri Bergson was influential and popular in the UK as well as in France. Katherine Mansfield was one of the many writers working in Britain at that time who were inspired by Bergson. This research explored how Mansfield and other writers attempted to express their own interpretations of Bergson’s theory.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	1,800,000	540,000	2,340,000
２００９年度	500,000	150,000	650,000
２０１０年度	500,000	150,000	650,000
２０１１年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総　計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学
キーワード：モダニズム文学

１．研究開始当初の背景

マンスフィールドがベルクソンの影響を受けていたことは時おり示唆されてきたものの（Sydney Janet Kaplan, *Katherine Mansfield and the Origins of Modernist Fiction*, Ithaca: Cornell UP, 1991)、Angela Smith が *Katherine Mansfield: A Literary Life* (New York: Palgrave, 2000) の一部において、具体的な箇所を挙げて類似点を分析する以前には、これをテーマとした詳細な研究は全く行われてこなかった。その後、2005 年に本研究代表者が英国スターリング大学

に提出した PhD 学位論文“One or Many: Bergsonian Readings of Katherine Mansfield’s Modernism” は、マンスフィールド文学におけるベルクソン哲学の重要性を初めて明確にしたものとして評価された。本研究は、この学位論文をより発展させるものとして計画された。

ベルクソンの哲学が欧米を中心とした幅広い地域でモダニズム文学に大きな影響を及ぼしたことに対する学術的関心が1990年代後半以降高まっており、ヴァージニア・ウルフ(Virginia Woolf) やジェイムズ・ジョイス(James Joyce) 等を論じたMary Ann Gillies の *Henri Bergson and British Modernism* (Montreal: McGill-Queen’s UP, 1996) が出版されて注目を集めたが、イギリスの文壇にベルクソンを紹介する役割を担ったマンスフィールドについてこそ、同様の研究の必要性があると感じ、本研究を進めた。

２．研究の目的

この研究の第一の目的は、マンスフィールドが他の多くのモダニスト作家に先駆けてベルクソンの哲学に関心を示したことに着目し、マンスフィールドの短編小説のベルクソン的傾向について論じるとともに、マンスフィールドが英語文学の分野においてモダニズムの発展の過程で果たした役割を明らかにすることであった。

同時に、第二の目的として、ベルクソンの哲学が本人の生前から今日に至るまでいかに評価され、誤解されてきたかを分析しながら、モダニズム文学とベルクソン哲学との関係を明確にすることも目指した。

マンスフィールドは、ベルクソンの哲学に刺激を受けた作家、画家、文芸批評家らが始めた小雑誌『リズム』(*Rhythm*) の編集において、アシスタント・エディターを務めていたほどで、その作品にはマンスフィールドのベルクソン哲学への関心と理解がはっきりと反映されている。『リズム』を通して知りあったスコットランド人画家 J.D. ファーガソン (J.D. Fergusson) らとともにベルクソンに強い興味を示したマンスフィールドに関連してベルクソンの功績が指摘されることがほとんどないにもかかわらず、ベルクソンを読んだことがないと自ら語っていたウルフが典型的な「ベルクソニアン」作家と見なされているのは、ベルクソンの理論が長年にわたって誤解されてきたこと無関係ではない。

この研究では、マンスフィールドを中心に、ウルフ、D.H. ロレンス (D.H. Lawrence) 等のモダニスト作家達のテクストやファーガソン、アン・エステル・ライス (Anne Estelle Rice) といった画家達の絵画を分析し、それぞれをベルクソンのテクストと比較することによって、ベルクソンとモダニズムをより正当に評価することを試みた。

ベルクソンの理論は、20世紀前半に、一方では絶大な人気を博し、他方では非科学的であるとして批判されたが、いずれの場合も、「直観」を重んじて「知性」の重要性を否定するのがベルクソンの哲学の特徴であるとする誤った解釈がもとになっている。これは、現在の批評に至るまで続いており、ベルクソンが混沌とした「流れ」としての時間にのみ現実を見出し、空間的なものを偽りにすぎないとして拒絶したかのように論じられがちだ。

また、たとえばアンドルー・サッカー (Andrew Thacker) がそうであるように、「意識の流れ」の手法に見られるような持続的なものとしての時間観もベルクソンの主張を代表するものであるかのように述べる者が多い: “Stream of consciousness technique in modernist fiction has, quite rightly, long been associated with philosophical theories of time and history, such as that of Bergson” (Andrew Thacker, *Moving through Modernity: Space and Geography in Modernism*, Manchester: Manchester UP, 2003, 5).

しかし、ベルクソンは、時間というものがとらえようのない「流れ」として存在するだけでなく、人間の知性によって「空間化」されうること、つまり、把握可能な単位に分割されうることも重視している。差異という概念に注目してベルクソンを論じたジル・ドゥルーズ (Gilles Deleuze) の解説 (*Bergsonism*, trans. Hugh Tomlinson and Barbara Habberiam, New York: Zone Books, 1988等) が明確にしているように、ベルクソンよれば、人間の意識において「直観」と「知性」は不可分な関係にあり、決して「直観」の方がすぐれたものであるとか、積極的に選びとるべき選択肢であるというわけではない。「直観」と「知性」の割合は人間の意識の中で絶えず変わり続けるが、一瞬たりともどちらか片方のみに偏ることはないというのが、ベルクソンの一貫した主張である。

このことは、一部のモダニスト作家（あるいは、いわゆる「ベルクソニアン」作家）について時に批判の対象となる政治的要素の欠如（らしきもの）と関連づけて論じられうるだろう。たとえば、マンスフィールドの作品は、フェミニズムやポストコロニアル批評の観点から批判されることがあるが、マンスフィールドの社会的、政治的関心の強さが作品にわかりやすい方法で表現されることが少ないのは、まさにこの「直観」と「知性」の割合の変動にマンスフィールドが常に注目して

いたからにほかならない。マンスフィールドの作品においては、「知性」が特定の登場人物を「女性」として、あるいは「ニュージーランド人」として、つまり、他とは区別されるべき者として認識することがある一方で、「直観」がその境界線を全く無視してしまうこともあることがほのめかされる。

この研究では、「ベルクソニアン」であるとはどういうことなのか、また、それがいかに評価されてきたのか、を問い直しながら、マンスフィールド研究においてこれまで行われてきた伝記的批評、ポストコロニアル批評、フェミニスト批評、ジャンル論等によっては十分に説明されることのなかったマンスフィールド文学の政治性の有無にも注目して、新しい解釈を展開することを目的とした。

先行研究においてはモダニスト作家の時間への執着と結びつけて語られることの多かったベルクソンの理論を、本研究ではマンスフィールドを中心とする作家や画家の作品における人種やジェンダー等をめぐる問題とジャンルの特質（フィクションと伝記、短編小説と長編小説の対比）について考える糸口として用いた。

３．研究の方法

(1) 資料収集

本研究に必要な主な作業は、文献や絵画の分析を行うことであった。20 世紀初めのイギリスにおいて、ベルクソンが専門家や一般の読者にどのように評価されていたか探るため、当時の新聞、雑誌類に広く目を通した。図書は、マンスフィールド関連図書、ベルクソン関連図書のほかに、広くモダニズム（文学、美術、哲学）に関するもの、ポストコロニアル批評、フェミニスト批評、伝記的批評、最近の短編小説理論に関連するもの等を購入した。

(2) 学会発表

平成20年9月にロンドン大学で開催されたマンスフィールドの渡英100年（および生誕120年）を記念した国際学会に出席して、口頭発表を行った。この学会に参加して以来、海外の研究者とのつながりが広がり、研究成果の発表の機会にも恵まれた。

(3) 論文執筆

平成 21 年 10 月には国際的なものとしては初めてのマンスフィールド専門の学術雑誌 *Katherine Mansfield Studies* がエディンバラ大学出版より創刊されたが、第 1 号に論文 “Katherine Mansfield and French Philosophy: A Bergsonian Reading of *Maata*” が掲載された。また、平成 23 年にイギリスで出版されたマンスフィールド専門書の中の一章も担当し、平成 21 年度からその作業を行った。

４．研究成果

本研究は、未だに根強く残るベルクソン哲学への誤解に注目することによって、モダニズムに対する新たな見方を提示した。特に、（ジョイスやウルフと比べれば）あまりモダニストとしての評価が定まっていないマンスフィールド、ロレンスらに対して、今までとは違った角度から評価することで、個々の作品にも新しい解釈を行うことができ、その結果、モダニズム文学の複雑さと豊かさを指摘することができた。

研究開始当初は、1912 年から 1913 年に出版されたマンスフィールドの初期の作品を分析し、マンスフィールドが早い段階から「知性」と「直観」のバランスというベルクソン的なテーマとともに音楽の比喩などのベルクソン的な表現を取り入れていたことを明らかにした。雑誌『リズム』に携わることによってイギリスの文壇にベルクソン哲学を紹介する役割を担ったマンスフィールドと画家のファーガソンの作品を通して、ベルクソン哲学の影響について考察した。

次に、直接『リズム』とは関係を持たなかった作家についても研究を行った。例えば、ベルクソンを読んだことがないというウルフ の作品には、ベルクソンの「直観」と「知性」のバランスに関する理論を思い起こさせるようなテーマや手法が見られることを確認した。

また、マンスフィールドやウルフをはじめとするモダニスト作家・詩人の作品を読み直すうちに、モダニズム文学においては、具体的な数字で示される実年齢と感覚的な「若さ」や「老い」との間のギャップという形で、ベルクソンのいう「空間化された時間」と「持続」のテーマが扱われていることが少なくないことにも関心を持つようになり、今後、この研究を進めたい。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

①Eiko Nakano, “Katherine Mansfield and French Philosophy: A Bergsonian Reading of *Maata*”, *Katherine Mansfield Studies,* 1, 68-82, 2009, 査読あり

〔学会発表〕(計１件)
①Eiko Nakano, “Katherine Mansfield’s Early Writing and Henri Bergson”, The Katherine Mansfield Centenary Conference, 2008年9月4日, University of London

〔図書〕(計１件)
① Eiko Nakano, “Katherine Mansfield, Rhythm and Henri Bergson”, ed. Janet Wilson, Gerri Kimber, and Susan Reid, Continuum, *Katherine Mansfield and Literary Modernism*, 2011, 30-41

６．研究組織
(1)研究代表者
中野　永子（NAKANO EIKO）
京都産業大学･文化学部･准教授
研究者番号：８０４１１０１５